

広島県のノタヌキモの産地

内山 寛

ノタヌキモ *Utricularia aurea* は、日本では関東地方以西に分布しているが、中国地方にはその産地はほとんど知られていない。特に広島県内にはその産地が全く知られていないようである。そこで、ここに広島県内の産地を紹介する。

筆者が、広島県内で初めてノタヌキモの産地を確認したのは1983年8月のことで、それは世羅郡世羅西町黒川周辺にある4ヶ所のため池と、同郡世羅町重永および御調郡久井町和草にあるそれぞれ1ヶ所のため池であった。この地域は、山地平坦面の高さが海拔300mから400mの範囲にあって、一般に世羅台地と呼ばれており、いわゆる吉備高原の一部にあたる。地質的には、その基盤の大部分は花こう岩からなっているが、一部には古生層などが分布している。平坦地は水田として利用され、灌がい用のため池が多く、山地はほとんどがアカマツ林で被われているが、近年大規模な農地開発が行われている。灌がい用のため池は水深が比較的に浅いため水生植物の被度が高い池も多くみられる。代表的な水生植物としては、コウホネ類、ヒツジグサ、ジュンサイ、ヒシ、ヒルムシロ類などがあげられる。

ノタヌキモの生育していたため池のうち世羅町にあるため池には発見以来毎年その開花期に訪れている。また、そこで採集したものを現在栽培しており、写真は栽培中に開花結実したものの腊葉標本を写したものである。なお、世羅町のため池にはノタヌキモの他に、ヒツジグサ、ホンバミズヒキモ、ホッスモ、ヤナギスブタなどが生育している。

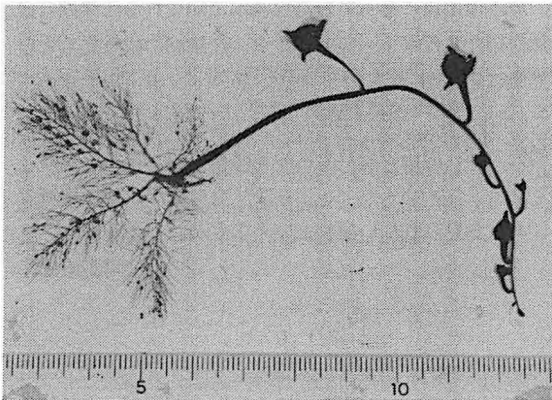


写真 ノタヌキモ

現在、筆者の知っているノタヌキモの広島県内の産地は上述の6ヶ所のみである。広島県全体でノタヌキモがどのように分布しているかは、特に県東部の調査が不十分でよくわかっていない。いずれ調べてみようと思っている。

知多半島における海塩生植物

磯部 亮一

知多半島は、1959年(昭和34年)の9月伊勢湾台風の影響で、有史最大といわれる高潮の被害をうけた。

そのため半島全沿岸に護岸堤防が築造されアシタバ・ハマグルマ・ハマエンドウ・ハマゴウ・コウボウムギ・ハマヒルガオ・スナビキソウ・タチスズシロソウ・コナミキ・ハマニガナ・ケカモノハシ・ダンチク・オカヒジキなど、海岸砂地に生育していた一律の海浜植物群落は、かなり変貌を余儀なくされた。

更に、高度成長期における名古屋南部工業地帯、衣浦臨海工業地帯の造成と相なり沿岸水路、河口はコンクリートで整備されて塩生植物は激減した。その後も塩性湿地や汽水性沼池など随所で埋立てられ、塩生水草の生育環境は年々と破壊されつつある。

昨年1986年夏以降、常滑市の海浜植物に詳しい中井三従美さんの協力で、半島内の海塩生植物を現地調査した。残存僅かな汽水性沼池に生育するカワツルモなど再確認したので、今回の知見と合わせて、往年の記録を加え概略ながら報告しておく。

沈水性のカワツルモは、伊勢湾側の美浜町奥田塩田跡に、又常滑市榎戸海岸に生育記録が残っている。現在、常滑市の生育地は宅地開発のため埋立てられ消滅。美浜



写真1. 知多半島で唯一東浦町のシバナ (1986.11.10)